

吉備国際大学
社会福祉学部研究紀要
第19号, 33-38, 2009

脱分化の思想形成に関する研究 — ノーマリゼーション原理が与えた影響について —

藤嶋 由

The study of a making of dedifferentiation ideas — About the effect of the principle of normalization —

Yuu FUJISHIMA

Abstract

In this research, the problem it had developed as the thought of the escape differentiation to which normalization that was one of the principles of social welfare was involved having what kind of theoretical frame was clarified. As a result, the sense of values of the supporters how understood a human being as the subject and the problem of the manner were big as a problem of today historically, and, for the thought formation of the dedifferentiation, what I was related to was clarified.

Key words : dedifferentiation, integration, normalization, recognition

キーワード : 脱分化, 統合, ノーマリゼーション, 認識

1. はじめに

J. サンヴィンは、施設中心のケアシステムの発展や構築を動機づけている価値は、分化の概念であると指摘している。彼は続けてノルウェーにおける社会政策の歴史的・政治的文脈の中からこの概念について検討し、「施設批判とノーマリゼーションイデオロギーの発展にみられる主な特徴は、発達障害者へのケアを特徴づけた分化の反転である」(Sandvin 1996 : 22)。と述べている。このことは脱分化の思想とノーマリゼーション原理が、障害を持つ人びとの地域生活の問題を考えていく上で不可分な関係にあることを意味している。

本研究の目的は、こうした脱分化の思想がノーマリゼーション原理との関係において、どのような過程を経て発展してきたのかという課題を明らかにしていくことにある。具体的にはノーマリゼーション原理の主要な側面の一つである「統合」に焦点をあて、障害を持つ人びとの地域社会への統合が、どのような理論的枠組みを有しながら発展してきたのかという課題を明らかにしている。

2. ノーマリゼーション原理の発展プロセス

ある原理が実践を通して具体化されるとき、そこには必ず理論が存在する。図1は、R.J. フライングが

示した、ある新しい原理や思想が概念化されるときに、その概念が辿る社会的発展のプロセスである。このプロセスは、「社会的革新の採用循環の段階図式」と称され、中園は、このR.J. フラインの図式を引用する中、次のように述べている。「新しい原理が①→②→③という理論の上では発展があっても、④→⑤→⑥の実践での発展が進んでいくとは限らない」「例えば、法律の条文にはノーマリゼーション原理が採用されていても、それが障害者の対人サービスの分野で実践されるとは限らない」「ノーマリゼーション原理は④の段階が具体化することによって障害者の生活に影響が現れるのであり、その後の実践が意味をもってくる」（中園 1996：146）。

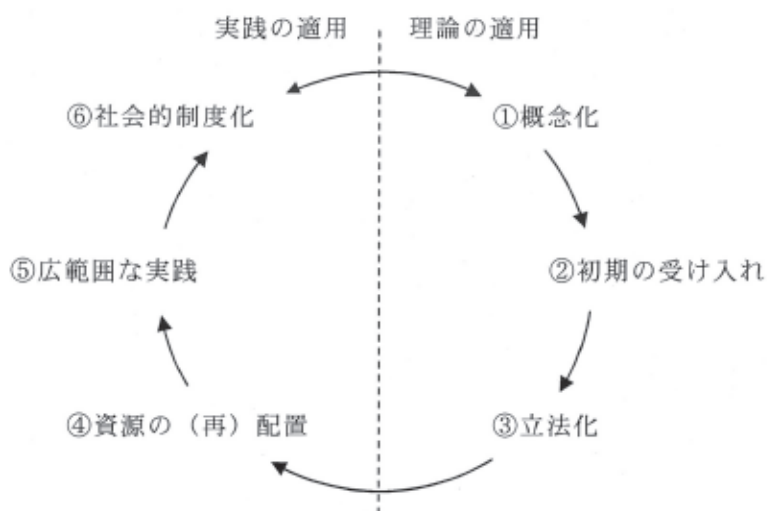


図1 社会的革新の採用循環の段階図式 (Flynn 1980 : 364)

このようにノーマリゼーション原理の発展における初期の課題は、③の段階における「立法化」とそれに伴う④の「資源の（再）配置」の部分にある。しかしここで重要となってくるのが、ノーマリゼーション原理の発展過程においては、この③と④の段階にあたる「立法化」やそれに伴う実践が、どのような理論的枠組みを有しているかによって、⑤の「広範囲な実践」段階以降における課題が大きく異なってくるという点である。

つまり、先行研究においても示唆されているよう

に、本来、「ノーマリゼーション原理は『チャレンジ』という本質的特徴をもつことから、その実践の発展や具現化は常に、『運動』という姿をとる」（中園 1996：145）。したがってその実践の発展には、実践を支える理論の理解、そしてそれに基づく一貫した方法・技術の展開といった視点がサービス提供者あるいは政策策定者に求められてくることとなる。

3. 脱分化の思想的背景

ノーマリゼーション原理が具体的な実践レベルで発展していくには、実践を支える理論の理解、そしてそれに基づく一貫した方法・技術の展開といった視点が重要となってくる。そしてこのノーマリゼーション原理の方法として、わが国でもその重要性が認識されて久しいのが障害を持つ人びとの地域社会への統合である。

N.E. バンク・ミケルセンは、1976年の論文の中で、障害を持つ人びとが地域社会の市民と同じ生活をしていくためには、この「統合」の実践が不可欠であることを述べている。彼はこの論文の中で、「ノーマリゼーションとは市民権をも含む生活のあらゆる側面において、精神遅滞者がほかの人びとと同等の立場に立つこと

とである」と述べ、ノーマリゼーションの原理とは、主として障害を持つ人びとを一つの群としてみる思想に対する矯正策であると主張している (Bank-Mikkelsen 1976)。

障害者自立支援法に象徴されるように、わが国で障害を持つ人びとの「統合」とそれに伴う生活支援システムの構築が本格化したのは最近のことである。これまで障害を持つ人びとの生活支援は、障害特性やその程度区分を基準に、常に分化の概念を基礎に発展してきた。また、こうした実践は、障害特

性の理解やその程度区分に即した実践形態を進展させ、障害を持つ人びとの「自立」や「社会参加」に大きな役割を果たしてきた。しかしこうした実践は、一方で障害特性やその程度区分に基づく対応を強調するあまり、対人サービスの分野において新たな問題を生じさせる結果ともなった。具体的には対人サービスの実践においては自然科学主義的な認識態度を基盤とした人間理解の方法が主流と化し、問題解決を図っていく上での質的側面である障害を持つ人とソーシャルワーカーという支援関係、あるいは障害を持つ人と障害を持たない人という社会関係における人間と人間の「関係」に大きな隔たりを生じさせるきっかけともなった。

専門職業としての障害を持つ人とソーシャルワーカーとの間で形成される支援関係の目的は、サービス利用者である障害を持つ人の自己決定の枠組みの中で、その問題解決が果たされていくことにある。したがって図2に示すように、問題解決の過程で専門職業としてのソーシャルワーカーがイニシアチブをとることでその目的が果たされても、それは社会福祉の持つ思想的本質的な課題解決を志向した理論実践とはならない。

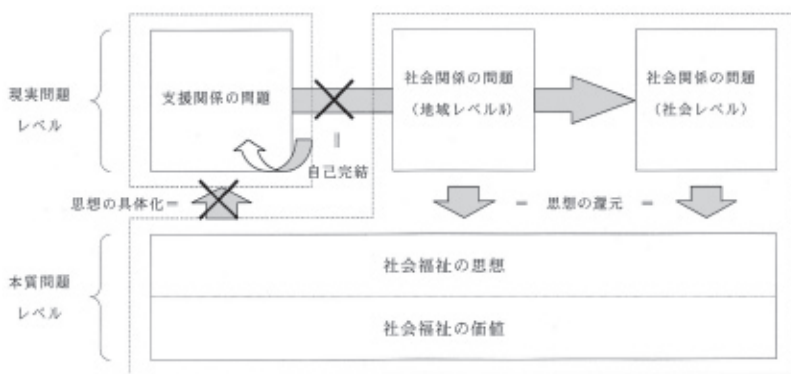


図2 社会福祉実践の断絶パターン

中園は2002年の編著書の中で、こうした問題に関して言及し次のように述べている。「私たちの社会はこれまで『障害』に関心を持ち、障害をもつ『人間』にあまり目を向けてこなかった。ノーマリゼーション原理は、市民が障害者に対してもっている意

識、思想、価値観などに問いかけ、彼らが私たちと同じ生活を実現するような社会にしていこうとする問いかけである」(中園 2002 : 231)。

問いかけた側の要求に、問いかけられた側が応えていくとき、そこでは対人サービスにおける支援者の価値観や態度が問題となってくる。特に対人サービスの分野においては認識する側が他者の存在をどのように認識するかによって、支援関係が社会関係において呈してくる思想は大きく異なってくる。つまりこのことを換言するならば、脱分化の思想的背景として、今日、障害を持つ人びとの地域社会への統合が強調される背景には、こうした障害を持つ人びとを対象化することを前提とした障害を持たない市民、サービス立案者、支援者の意識的無意識的価値観や認識態度に対する問いかけが、その思想的萌芽形成に大きな影響を与えてきたのではないかと考える。

4. 物理的統合と社会的統合

「家庭から隔離して管理システムのなかに封じ込めるような街の真ん中の小規模施設は人里離れた山の中にあるのとなんら変わりはない」「いまの福祉

の体質を変えなければ、施設がいくら街の真ん中にあっても意味がない」

(川上 1979 : 151-152)。先行研究におけるこうした指摘からも窺えるように、障害を持つ人びとの地域社会への統合とは、単に物理的側面としての問題解決だけを意味することではない。障害を持つ人びとの地域社会への統合とは、物理的な側面を基礎に、障害を

持つ人びとが他の市民と同様に、地域社会の中で市民として生活していく権利が保障された状態のことを指す。

B. ニイリエは、1980年の論文の中で、この「統合」について言及し次のように述べている。「統合とは、

お互いの尊厳を認め合い、共通の基本的な価値と権利を認め合うという人と人との関係がベースになっている。もしそのような認識がなければ、疎外、隔離、排斥がおこる」(Nirje 1980:102)。そしてこうした見解を含めて、今日、「統合」の理論を、さらに社会学的見地から検討し、ノーマリゼーション原理の実践の発展に大きく影響を与え続けているのが、W.ヴォルフエンズベルガーである。彼は1981年の著書の中で(Wolfensberger 1981)、障害を持つ人を「逸脱している人」と定義し、「逸脱した人たちは、逸脱していない人たちに最大限に“さらされる”べきである」と述べている。また、同様にその方法として「統合」を取り上げ、「統合は、それが社会的であるときのみ意義がある」「統合は、社会的相互作用と受容がふくまれ、単に物理的な外観だけでない時に、はじめて意義あるのである」と述べている。つまりW.ヴォルフエンズベルガーによれば、障害を持つ人びとの地域社会への統合には、物理的なものと社会的なものがあり、図3に示すように、前者は後者の実践の中に包含された形でその実践計画が立案されていかなければならないことを指摘してい

る。

なお、W.ヴォルフエンズベルガーは、表1に示しているように1972年に、ノーマリゼーション原理の目標が、実際のサービスの質としてどのように実現されているのかを測定していくためのプログラム分析『PASS (= Program Analysis of Services System's)』(Wolfensberger 1981:324-326)を考案し、その中にこの「統合」に関する評価項目をあげている。ここではその詳細については触れないが、これらはいずれも「逸脱の並置」の問題を基礎に障害を持つ人びとに付与されがちなステレオタイプの変容を目的に考案されたもので、P.リンドレイとT.ウェインライトは、1992年の編著書の中で、英国においてはこの『PASS』を用いたワークショップが、ノーマリゼーションの実践の発展に飛躍的な成果を上げてきたことを述べている(Lindley and Wainwright 1992:42-62)。

5. 生活支援と認識問題

W.ヴォルフエンズベルガーによって考案された「逸脱」を主概念としたノーマリゼーション原理の特徴は、障害を持つ人びとを「価値が低められた」人びとという観点から、その生活を理解する方法にある。したがってそこで重要となってくるのは、サービスプログラムを規定付けている価値、つまりそれらを規定付けている我々の価値観となってくる。W.ヴォルフエンズベルガーは、先の同書の中で、こうした価値や価値観の問題は、結局のところ個人の現実理解の仕方に依拠し、「逸脱は私たちがつくるものである」「それは、見る人の目にある」(Wolfensberger 1981:27)と述べている。

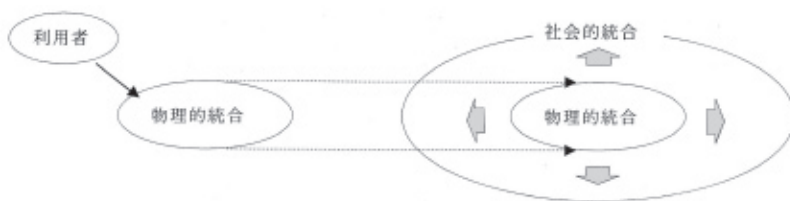


図3 「統合」を巡る2つの側面

表1 『PASS』における「統合」に関する項目

	物理的統合	社会的統合
逸脱の並置	近接性	プログラムと施設につけられるラベル
	便利さ	建物の感じ
	周辺状況	逸脱したスタッフとの接触
	規模や分散度	他の逸脱した人との接触
		社会的統合の機会

出典：Wolfensberger (1981) *The Principle of Normalization in Human Services* (= 1982, 中園康夫・清水貞夫編訳『ノーマリゼーション-社会福祉サービスの本質-』学苑社.), p324-326を一部改変

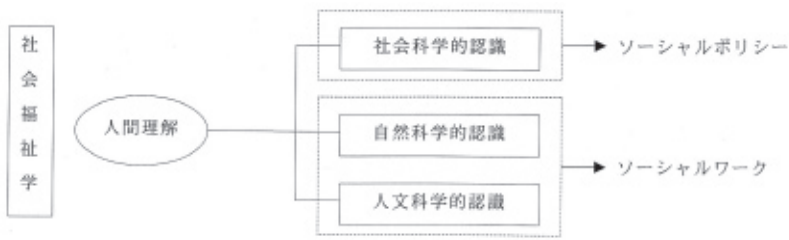


図4 社会福祉学研究における人間理解の認識分類

今日、障害を持つ人とソーシャルワーカーとの間で営まれる支援関係は、利用者主体を原則に生活支援を主たる目的としながらその実践展開が図られている。しかし応用科学としての要素が強い社会福祉学研究において利用者の抱える生活問題の現状把握及び問題分析のための視点は、図4に示すように極めて多岐に渡る認識方法で捉えることができる。

特に近年、ソーシャルワークを中心とした対人サービスの分野においてはサービス利用者としての障害を持つ人の問題を身体的・精神的・社会的な問題に区分し、人間を部分の総和として捉えることで問題解決を志向していく傾向が主流となっている。

しかしこうした要素主義とも言うべきアプローチは、他方、主体としての人間を客体化し、モノ化して理解していくという自然科学主義的な認識態度に基づく手法を採用するため、利用者主体という原理・原則の間では大きな矛盾が生じてしまうこととなる。

そもそも学際研究としての領域を社会福祉学研究に求めるソーシャルワーク実践において主体としての人間をどう捉えていくかという課題は、その実践に従事する者の依って立つ認識の基盤によって大きく変わってくる。例えば専門職業としてのソーシャルワーカーの側に、かつて教えられた理論や因果関連の概念があり、そのことの中でのみサービス利用者の現実が説明されるならば、その時点でワーカーの前に現前するサービス利用者の存在は、主観的経験が排除された一個の説明概念の対象にしか過ぎなくなってしまう。

つまりこれらのことを踏まえた上で、最後に本研

究の結論について述べると、今日、「統合」を含めたノーマリゼーション原理の実践は、W. ヴォルフエンズベルガーによって考案された科学的社会的社会理論を主流にその実践展開が図られている。しかし彼がその理論構築を果たす過程で「逸脱は私たち

がつくるものである」「それは、見る人の目にある」と指摘した背景には、こうした対人サービスにおける認識の問題が、結局のところ社会福祉の実践思想の問題を考えていく上で最も根幹的な部分をなし、そのことがまた脱分化の思想形成に大きな影響を与えてきたのではないかということである。

6. おわりに

社会福祉の問題を政策の問題として規定するか、技術の問題として規定するか、あるいはそれらの総体としてシステムの問題として規定するかは、個々人の関心の持ち方や問題の把握方法によって大きく異なってくる。しかしである。社会福祉の問題が様々な次元でいかなる視点で把握されようともそこには首尾一貫とした社会福祉の諸原理が存在する。

そしてこの原理の存在には、社会福祉学研究に限れば、理論の妥当性を実践成果で検証するか、実践成果の蓄積の中から理論を抽出していくかといういずれかの方法によって、普遍性が加えられていくこととなる。

本研究では、今日、社会福祉の原理の一つとなっているノーマリゼーション原理が内包している脱分化の思想がどのような理論的枠組みを有しながら発展してきたのかという課題を明らかにしてきた。その結果、脱分化の思想形成には、主体として人間をどのように把握するかという支援する側の価値観や態度の問題が、歴史的にも今日的課題としても大きく関係していることわかった。

現代社会において障害を持つ人びとが地域生活を

営むことは、あたりまえの価値として認識され始めている。しかしこうした価値が単なる社会福祉の価値のみならず社会の価値として根付いていくためには、今後、社会福祉の実践、そして対人サービスの

実践を思想として捉え、他の社会思想との比較の中でその存在を吟味していくことが、社会福祉学研究に課された今日的重要な課題となっている。

文 献

- Bank-Mikkelsen,E,N.(1979) *The Principle of Normalization* (=1979, 中園康夫「ノーマライゼーション (normalization) の原理」『四国学院大学論集』42, 1-15.
- Flynn,J,R. and Nitsch,E,K. (1980) *Normalization Accomplishments to Date and Future Priorities*, Flynn,J,R. and Nitsch,E,K,eds.*Normalization,Social Integration and Community Services*,Univ.Park Press.
- 川上重治 (1979) 『福祉施設変革論・序説-コミュニティによる福祉と教育の創造-』田畑書店.
- Lindley,P and Wainwright,T. (1992) Chapter2,Brown,H.and Smith.H,eds.*Normalization-A reader for the nineties*. (=1994, P. リンドレイ・T. ウェインライト「第2章: ノーマライゼーションの訓練-転換か関与か?-」中園康夫・小田兼三監訳『ノーマライゼーションの展開-英国における理論と実践-』学苑社, 42-62.)
- 中園康夫 (1996) 『ノーマライゼーション原理の研究-欧米の理論と実践-』海声社.
- 中園康夫 (2002) 「ノーマライゼーションの課題」阿部志郎・右田紀久恵・宮田和明・松井二郎編『戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望-II 思想と理論-』ドメス出版, 221-242.
- Nirje,B. (1980) "On integration". (=1998, 河東田博・橋本由紀子・杉田穂子編訳「統合について」『ノーマライゼーションの原理-普遍化と社会変革を求めて-』現代書簡, 102-104.)
- Sandvin,J. (1996) Chapter12,Mansell,J,and ricsson,K,eds.*Deinstitutionalization & Community Living*. (=2000, J. サンヴィン「第12章: ノルウェーにおける地域サービスへの移行」中園康夫・末光茂監訳『脱施設化と地域生活-英国・北欧・米国における比較研究-』相川書房, 212-225.)
- Wolfensberger,W. (1981) *The Principle of Normalization in Human Services*. (=1982, 中園康夫・清水貞夫編訳『ノーマライゼーション-社会福祉サービスの本質-』学苑社.)